

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第67号

平成20年 10・11・12月



鬼瓦（伝奈良県中山瓦窯出土） 奈良国立博物館 （平常展「仏教美術の名品」より）

特別展

第60回 正倉院展

10月25日（土）～11月10日（月）
東・西新館

特別陳列

おん祭と 春日信仰の美術

12月6日（土）～
平成21年1月18日（日）
東新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 11月29日（土）～

中国古代青銅器

本館 平常開館



白瑠璃碗

第60回 正倉院展

10月25日(土)～11月10日(月)

東・西新館



紫檀木画双六局



犀角魚形

恒例の正倉院展が今年も奈良の秋に彩を添えます。精緻な技巧が凝らされた工芸品の数々の中には、種類としてまとまったものとして「帯と佩飾品」また天蓋が含まれています。そのほか、奈良時代の社会の種々相を窺わせる文書や、異色の宝物として、人面を象った容器に仕立てられた「椰子実」や、「虹龍」と称されている貂のミイラなども出陳されます。



紫皮裁文珠玉飾刺繍帶残欠

「紫皮裁文珠玉飾刺繍帶残欠」は、正倉院に伝わる帯の中でも最も豪華な作りの品として知られています。白い絹布(絶)に淡褐色の羅を重ねたものを地とし、多彩な色糸で暈配色の連珠文による斜め格子を表し、間に小花を配して、紫の染革を切り抜いた花形(裁文)を綴じ付け、縁には組紐を廻らす。下縁には色ガラス・真珠・水晶などを糸に通した垂飾が付き、刺繍の連珠文の続きのように見える。意匠に凝り、精緻な技巧を凝らして作られた、宝庫の帯の中で最も豪華な品です。

奈良時代の貴人は、唐の官人の風習に倣って、腰帯に下げる種々の飾り(佩飾品)を楽しんでいました。今回は、サイの角から彫り出して、鰓や鱗などを線刻し金泥を塗り込み、鱗は金泥で描いて、銀の鏝を付けた「犀角魚形」、単独にあるいは数個まとめて組紐の網でくるんでいた「水精玉」「瑠璃玉」「琥珀玉」や、それらの飾を帯に結びつけていた色々の暈配の紐の束「組紐」などが出陳されます。



布天蓋



灌頂天蓋骨

天蓋は、仏像や僧侶を荘厳するため頭上を覆う傘です。宝庫に見られるものはいずれも、木製の骨の上に布帛製の屋蓋を張る構造で、骨と屋蓋が別れて多く伝わっています。骨は、穀と呼ばれる軸に、数本の腕木を差し込む形式で、穀の上部には吊り金具が付き、中には下部にも吊り金具が付く品があり、それは灌頂天蓋と称され、天蓋の下に幡を吊すもので、長い幡脚の端に信徒の頭が触れることにより、罪障が滅せられるといわれました。屋蓋は、綾や錦・縹・縹など多種の裂を縫い合わせて作られた品が普通ですが、中には簡素な麻布製の珍しいものもあります。いずれも、中心には穀の吊り金具を通す孔が開けられ、内面の隅に縫い付けられた皮製の小袋は、腕木の先を差し込んで固定するための造作と考えられます。



方形天蓋

平常展

「仏教美術の名品」より

宝冠阿弥陀如来坐像

木造・漆箔 像高五四・五cm 平安時代(十一世紀)
京都 安楽寿院
本館(第9室) 展示中



安楽寿院は、平安後期に歴代の法皇が御所とした離宮、鳥羽殿に附属する仏堂として、保延三年(一一三七)に鳥羽上皇によって創建された。

大衣を偏袒右肩に着け、腹前で阿弥陀の定印を結び、結跏趺坐する。この点ではふつうに目にする阿弥陀如来の姿に等しい。相異なるのはその頭部で、螺髪を表しつつさらに宝冠をかぶっている。このような宝冠をかぶる阿弥陀如来像には、頭髪表現によつて大きく二通りが認められる。ひとつには菩薩のように髻を結う像。もうひとつが本像と同じく螺髪の上に宝冠をつけるものである。

前者については、八十一尊曼荼羅と呼ばれる天台系の金剛界曼荼羅中に図像の典拠を見いだすことができ、天台寺院で行われた常行堂の本尊として造立されたと考えられる。後者についてはその背景が必ずしも定かではないが、密教的儀軌に基づく造像であることは確かだろう。

(財)住友財団の助成により保存修理が行われ、本年三月に完了した。

岩田茂樹(当館学芸部長補佐)



◎春日宮曼荼羅 奈良・南市町自治会



◎四方殿舎利厨子 奈良・能満院

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

平成20年12月6日(土)～平成21年1月18日(日) 東新館

歳末の奈良を彩る風物詩・春日若宮おん祭は、平安時代の保延二年(一一三六)九月十七日にはじまったとされています。その後祭日は、室町時代から十一月二十七日、明治十一年(一八七八)からは現行の十二月十七日と変わりましたが、その間絶えることなく続いたとされ、今年で八七三回を数えます。

この展覧会は、おん祭の行われる季節に合わせて、主祭神である若宮神やおん祭に関わる品々を集め、展示を通じておん祭の一端を紹介する企画です。今回は春日若宮祭礼田楽座に伝わったものなど、特に田楽関連の資料が充実します。また、春日一宮の本地仏・釈迦如来に因んだ春日舍利信仰に関係する遺例を中心に、広く春日信仰に関わる品々を併せて紹介し、春日講に関係する資料と合わせて春日信仰の広がりと多様性を感じていただきます。



春日若宮御祭礼絵巻 中巻 奈良・春日大社

平常展 「仏教美術の名品」より

越中国射水郡鳴戸村墾田図(麻布)

麻布 墨画 淡彩 墨書 縦八〇・五 横四〇・八(縦・横は最大値)
奈良時代 天平宝字三年(七五九)

この麻布に描かれた図は、越中国射水郡(現在の富山県北西部)にあった東大寺領荘園の範囲と面積を示したもので、奈良時代の天平宝字三年(七五九)に作成されました。荘園を描いた図としては最古級に属しますが、保存状態は良好で、作成された当時の姿をよく保っていると思われます。

横長の画面の中央には、墨線で縦九行、横十三列にわたる碁盤目状の条里の区画が大きく描かれ、一つ一つの枠目には墾田と未墾地の面積が記されています。現地の地形を示すような絵画的表現はほとんどなく、画面左上から中央にかけて引かれた、水路を示すと思われる二条の蛇行する墨線がみえる程度です。条里区画図の右側には表題および図中に示された土地面積の総計が記され、左側には作成年月日と作成者の署名があります。条里区画図の部分も含め、画面上の文字のある箇所には朱印「越中国印」が全部で九十八顆捺されています。

この荘園図は、かつて東大寺に伝来し、現在は大半が正倉院宝物となっている「東大寺開田図」の一つです。荘園図は紙に描かれるものが多いのですが、奈良時代には紙のほかに麻布を素材とするものがありました。

本品は奈良時代の貴重な麻布製の荘園図として、その存在は古くから知られていたのですが、長く個人蔵であったため公開の機会に恵まれず、これまで専門家でもほとんど目にすることがありませんでした。

昨年度、本品は当館の所蔵となりました。そして今回、初めて展示室でお披露目いたします。

野尻 忠(当館研究員)
西新館 11月29日(土)～平成21年1月4日(日)

下描きが教えてくれること

北澤 菜月（当館研究員）

絵画に親しく接していると、仕上げの線とは別に下描きの線が見えることが意外によくある。作品が完成する以前の製作過程を伝えるその線はあつう、すでにできあがった作品をみることにできない現代の我々にとつて、とても貴重である。

下に描かれた図像が仕上げの段階で変更されたならば、そこには何らかの特別な状況が想定される可能性が高く、作品の製作背景に近付くための貴重な情報源となるし、また実際に線を追うことによって、描き手が作品に向かった感覚を追体験できることも、大きい。特に実作品を前に下描きの線に接すると、作品



(図2a) 図1部分



(図2b) 図1部分 近赤外線撮影

は背後にある思想が生み出した世界であると同時に、それを理解した画家の筆先が、平面上に見事に表現してみせた世界であることを再認識させられる。ここでは館藏品を中心に寓目した興味深い例をいくつか紹介

してみたい。

画絹に描かれる仏画は、墨線で下描きした上に色を塗り、その上から下描き線に重ねて仕上げの線（描き起こし線）をひく。そのため完成した作品では、仕上げの線に隠され下描き線は見えないはずだが、これが見える場合がある。中国・南宋時代に描かれた館蔵の仏涅槃図（図1 重文）はそのわかりやすい例である。涅槃の時を迎えた釈迦の安らかな顔を上げしげと見つめると、鼻筋から口元にかけて仕上げにひかれた朱線とは違う線が見つかる。そうわかつてみれば図版でもはつきりと、顔面の肌色の下に下描きの墨線が確認できるのだが、試みに墨線をくつきり写してくれる赤外線写真を撮影してみる。すると、最終の仕上げよりもやや正面に顔を上げた少し表情の異なる釈迦の顔がみえる（図2）。描きあげる際、下描き線と異なる線をひいたのは、顔の傾きによって微妙な表情の違いが生まれることに配慮したからと思われ、画家がより適切な表現を求めたための改変と考えられる。

下描き線と仕上げ線では図像が全く異なる作品もある。館蔵の春日社寺曼荼羅（図3 十三〜十四世紀）は当初、春日曼荼羅の通例通り、五尊の本地仏を空中の円相内に描こうとした痕跡が下描き線としてはっきりと残る。けれど結果的には本地仏を社殿から湧き上がる雲上に立つ姿に表現し仕上げている。（図4）下描き線と異なる図像に仕上げられた作品として、東京国立博物館の孔雀明王像（国宝、十二世紀）がよく知られている。この作品では密教で規範となっていた弘法大師空海ゆかりの図像を下描きしながら、最終的にこれを変容させて仕上げている。このように定型化していた図像を下描きしつつも、仕上げ段階で変更する場合、定型では表し得ない特別な何か（特別な利益や新たな思想など）を作品に籠めようとする制作環境があったことが想定される。

さらに、曼荼羅に代表されるような幾何学的画面構成をもつ



(図3) 春日社寺曼荼羅 当館



(図4) 図3部分

仏教絵画では、平面上で整った正確な表現を行うために下描き時に墨線で「しるし」を付けることがある。例えば、尊像を配すべき位置を示す線が、尊像の腹部付近に十字にひかれる作品がある。また、奥行きをもつ三次元の空間を構築するために、縦方向の中心軸の直線とそこから左右に向かって斜めにひかれた下描きの線が見える作品もみられる。京都・知恩院所蔵の阿弥陀経曼荼羅（重文、十三〜十四世紀）にはこの線を確かめることができた。この作図法は西洋美術で「魚の骨的構成」といわれる一種の遠近法であり、ほぼ同時期イタリア・シナで活躍した画家ドゥッチオ（Duccio di Buoninsegna、一二五頃—一三一九）が用いたことが知られている。無論、直接的関係性を説くつもりはないが、西洋と共通する三次元空間構築図法が日本で同時代に行われていたことを知らせており、非常に興味深い。普段は目に触れることの少ないものであるが、このように下描き線は多くのことを私たちに伝えてくれている。



方鼎(当館 坂本コレクション)



○木造狛犬(手向山八幡宮)



○木造伎楽面(迦楼羅)(東大寺)



○木造広目天立像(興福寺)



○木造伝明星菩薩立像(弘仁寺)

彫刻

第1室

平常展

仏教美術の名品

本館 第1～13室
10月～12月

第3室

【注目の逸品】

薬師如来坐像

国宝 当館
木造 漆箔 平安時代(九世紀)



○石造十一面観音立像、○石造三尊仏龕(以上、当館)、○石造三尊仏龕 石造仏五尊碑像、石造仏立像、石造仏浄土碑像(以上、個人)

第7室

【伎楽面】○木造伎楽面(治道 迦楼羅 崑崙 醉胡徒)(東大寺)

第8室

【金銅仏】○銅造誕生釈迦仏立像(正眼寺)、銅造観音菩薩立像(当館)、○銅造菩薩立像(法起寺)、銅造菩薩立像(興福院)、○銅造観音菩薩立像(観心寺)、○銅造菩薩半跏像(神野寺)、○銅造菩薩半跏像(東大寺)、○銅造観音菩薩立像(金剛寺)、○銅造薬師如来立像(般若寺)〔11月24日〕、銅造観音菩薩立像(個人)〔11月26日〕

第12室

【動物彫刻】○木造狛犬、木造牛頭、木造獅子(以上、当館)、○木造狛犬(手向山八幡宮)

第13室

【明王像】木造五大明王坐像、銅造不動明王立像(以上、当館)、木造不動明王立像(個人)、銅造大威德明王騎牛像、○木造愛染明王坐像(以上、当館)

【天部像】木造四天王立像(現光寺)、○木造十二神将立像(辰・未)(室生寺)、○木造増長天立像(法明寺)

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション

本館 第14 15室

中国古代の商・殷から漢時代に製作された青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、甗、方彝、卣、鬲、甗、鼎、鬲、高、簋、豆、盤、匜、盂、壺、鐘、鈃、扁壺、蒜頭壺、甗、甗、博山炉、鎮子、鏡、鍔子など(当館)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

【迎講の阿弥陀仏】

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

○木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)



◎金光明最勝王經卷第二殘卷〔後宇多天皇經〕(当館)



◎十二天像(伊舍那天)(西大寺)



銅三鉗杵(当館)



◎宝相華文線刻蓮華形磬(赤松院)



土偶(山形県杉沢遺跡出土)(当館)

平常展

仏教美術の名品

〈絵画・書跡・考古・工芸〉

11月29日(土)～平成21年1月4日(日)

西新館

絵画

◎二字金輪曼荼羅(南法華寺)、六字経曼荼羅(当館)、◎文殊菩薩像(西大寺)、◎五大尊像(来振寺)、◎俱利伽羅龍剣・童子像(当館)、◎毘沙門天像(知恩院)、◎十二天像(伊舍那天)(西大寺)、智光曼荼羅(文化庁)、◎二河白道図(蓮光寺)、◎九品来迎図(上品上生)(瀧上寺)、春日千体地藏図(当館)、◎十六羅漢像(宝厳寺)、◎山王宮曼荼羅(当館)、扇面画帖(山王図・花鳥図)、◎群邪絵(梅檀乾闥婆)、牧牛図(十牛図のうち)、◎安東門忠像、一休宗純像(以上当館)

書跡

◎金光明最勝王經卷第六(当館)、瑜伽師地論卷第十六(五月一日経)(個人)、大般若経(東明寺)、大般若経卷第四百六十(中尊寺経)、道神足無極變化経卷下(神護寺経)、◎金光明最勝王經卷第二殘卷〔後宇多天皇経〕、越中国射水郡鳴戸村梨田図(麻布)(以上、当館)

考古

土偶(山形県杉沢遺跡出土)(当館)、人面付壺形土器(茨城県小野天神前遺跡出土)(茨城県立歴史館)、銅鐸(妙国寺)、人物線刻裝飾付子持壺(以上、当館)、素弁蓮華文軒丸瓦(奈良県横井廃寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦(均整唐草文軒平瓦(奈良県山田廃寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦(奈良県山田寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県川原寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県東大寺出土)、バルメット文隅木蓋瓦(和歌山県上

野廃寺出土)(以上、当館)、鬼面文軒丸瓦(奈良県地光寺出土)、鬼面文隅木蓋瓦(奈良県只塚廃寺出土)(以上、橿原考古学研究所附属博物館)、鬼面文鬼瓦(奈良県葉師寺出土)(京都国立博物館)、鬼面文鬼瓦(奈良県中山瓦窯出土)(当館)、鬼面文鬼瓦(伝奈良県秋篠寺西塔址出土)(個人)、◎栗原寺伏鉢(談山神社)、三彩陶片(奈良県・条高校出土)(当館)、三彩陶片(三重県伊勢寺廃寺出土)(個人)、◎佐井寺僧道業墓出土品、◎山代忌寸真作墓誌、行基舍利瓶残欠、灰釉平瓶(奈良県壺坂寺奥院出土)(以上、当館)、須恵器骨蔵器(奈良県甘樫丘出土)(以上、個人)、銅製骨蔵器(奈良県葛城市新庄城山出土)、銅製骨蔵器(奈良県火野谷山出土)(橿原考古学研究所附属博物館)、◎銅製経筒・滑石製外筒(伝福岡県出土)、◎滑石製弥勒如来像(長崎県鉢形嶺塚出土)(以上、当館)、六角宝幢形経筒(六十六部廻国巡礼経筒)(個人)

工芸

舍利容器、棺形舍利容器(以上、当館)、銅製舍利容器(方形、六角形、佐波理合子)(個人)、◎金銅透彫舍利容器(西大寺)、◎三角五輪塔形舍利容器(浄土寺)、金銅蓮台形舍利容器、木製宝塔(以上、当館)、線刻千手観音鏡像(松竹双鳥文)(個人)、◎線刻阿弥陀如来鏡像(松喰鶴鏡)、線刻蔵王権現鏡像、千手観音鏡像、男神対向鏡像、孔雀文鏡、孔雀文鏡(以上、当館)、◎銅華文文鏡(峰定寺)、◎宝相華文線刻蓮華形磬(赤松院)、◎宝相華文如意、散蓮華螺文螺鈿卓(以上、当館)、◎五獅子如意、◎黒漆螺鈿卓(以上、東大寺)、金銅独鈷杵(松尾寺)、銅三鉗杵、金銅五鉗杵、白銅五鉗杵、◎金銅独鈷鈴、金銅三鉗鈴、金銅宝珠鈴(五種鈴のうち)、金剛盤(正和三年銘)(以上、当館)、金胎両界三摩耶形花瓶(持福寺)、金銅一面器(西大寺)

パネル展示

修復文化財

パネル展示

国宝 十一面観音像(当館蔵の)

地下回廊
光学的調査

【表紙写真解説】

鬼面文鬼瓦

きめんもんおにがわら

当館蔵
伝奈良県中山瓦窯出土
瓦製
奈良時代(八世紀)

大きくカールした巻き毛。大きく見開いた眼に、安定感のあるどろりとした鼻。カッと声が聞こえそうな大きく開いた口からは、鋭い牙が見える。本品は奈良時代を代表する平城宮式鬼瓦のうち、最も大型の鬼瓦として製作され、宮内の建物の屋根を飾ったものである。平城宮の瓦を焼成していた奈良山丘陵の中山瓦窯から出土した。

瓦の製作技法及び瓦葺の技術は仏教伝来とともに、朝鮮半島・百済の瓦博士四人が伝えたことが『日本書紀』に見える。法隆寺若草伽藍から出土した日本の最初期の鬼瓦はやはり百済のものとよく似た複数蓮華文を飾るタイプで、棟の端を塞ぐ棟端飾瓦、いわゆる鬼瓦には当初仏教と縁の深い蓮華文が飾られたことがわかる。

七一〇年の平城宮造営を契機として、「オ二」の顔で飾った鬼瓦、いわゆる鬼面

◎「国宝」 ◎「重要文化財」

すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

文鬼瓦が採用される。「オ二」は今の私たちが持つ地獄の鬼のイメージとは異なり、聖なる神獣であつたと考えられている。パレスタイルとして創出されたこの平城宮式の鬼面文鬼瓦は、外縁を持ち、顔の周囲に巻き毛を配する点、下顎を省略せずに表現する点などを共通の特徴とした。同時期の朝鮮半島・統一新羅でも多くの鬼面文鬼瓦が製作され、その情報を受容して日本独自にデザインし、製作したものであろう。特筆すべきはその大きさで、縦五〇・五センチ、幅四九・七センチと非常に大型で、彼の地の本家の鬼瓦を凌駕する。本品は、出土の分布から現在復元が進む大極殿の屋根に用いられたものと考えられ、この鬼瓦がデザインされ、製作が開始されたのは、聖武天皇即位に向けた宮内整備時と推定されている。威容を誇る大極殿にふさわしい鬼瓦として、当時の最新の鬼面を取り入れ、特別大きく仕立てられたのであろう。

岩戸晶子(当館研究員)

平常展「仏教美術の名品」(考古)

西新館 11月29日(土)

～平成21年1月4日(日)

展示の現場から

ドイツ国立展覧会ホール (ボン)での醍醐寺展

野尻 忠
(当館研究員)



会場風景

教育プログラムの冊子



今年の四月～八月に、ドイツ連邦共和国ボン市にある国立展覧会ホールで「聖なる山の寺宝―醍醐寺・日本密教の僧院―」という展覧会が開催された。京都・醍醐寺の寺宝を展示し、醍醐寺の信仰と伝統、さらに広く日本の密教、仏教とその造形美を彼の地で紹介するという趣旨である。

この展覧会にかかわって、私は開幕前の陳列作業と、会期中に二回あった展示替えのうち一回を担当し、都合二度ドイツへ行った。

陳列作業は、日本側と現地のスタッフとが協議しながら進めたが、彼等が作品を扱う際の常識と、日本側の常識があり、それをすり合わせて行く必要があった。

たとえば掛幅装のものを壁にかけて展示する場合、

合。彼等は紐を掛ける金具の位置を、事前に計算して割り出し、寸分の狂いもなく決めようとする。日本では、もちろん事前に計算はするが、一度作品を掛けてみてから微調整するのが常である。それは、作品が最も映える高さに調整したいと考えてのこと。各作品の構図はそれぞれであるし、周囲の展示品との兼ね合いもある。

この微調整という考え方をドイツの人々に理解してもらおうのには時間を要した。しかし、このことは、実際に面と向かつて議論したからこそ最終的には伝わったのであつて、現地で作業が始まる前に、電話なり電子メールなりで伝えていた日本側の思惑は、現地に着いてみると、反映されていないことが多かった。

事前の準備は周到に済ませておくことが理想だが、完璧はあり得ないし、いったん現地に入ったら出来ることをやるしかない。今回の陳列作業を通じ、共に議論したドイツ側スタッフの方々からも、また同行した先輩の日本人学芸員の方々からも多くを学んだ。

ドイツ側の展覧会運営から学ぶ点もあった。教育プログラムの充実はその一つである。展示室に接して映像室が設けられ、三十分以上に及ぶ醍醐寺の番組が流れている。これの制作のために、ドイツ側のスタッフが何日間も醍醐寺に泊まり込み、撮影したという。また、講演会やシンポジウムをはじめとして、声明公演、映画上映やワークショップなど会期中の行事をまとめた二十四ページからなる冊子が作られ、会期が始まるかなり前から配布されている。日本では、たとえば当館の場合、会期中の行事はホームページで告知するのが精一杯である。いずれは、こうした部分の充実が求められるようになるのだろうか。

海外展には、非常に多くの人が関与する。各人が、それぞれの持ち場で役割を果たし、しかも全員が同じ方向に向かって協力し合わなければ、展覧会は実現しない。私は少し手を貸しただけだが、この大きなプロジェクトを動かし、調整にあたられた方々には敬意を表したい、と心底から思う。

●公開講座●

「第60回 正倉院展」

10月25日(土) 「正倉院の白瑠璃碗」

谷一 尚 (岡山市立オリエント美術館長)

11月1日(土) 「正倉院に伝わる天蓋をめぐる」

西川明彦 (宮内庁正倉院事務所保存整理室長)

11月8日(土) 「正倉院宝物とシルクロード」

内藤 栄 (当館学芸部長補佐)

特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」

12月20日(土)「おん祭の田楽とその周辺」

岩坂七雄 (奈良市教育委員会)

※各回とも、午後1時30分～3時、当館講堂にて、**先着200名**(午後1時より講堂入口で整理券を配布し、開場します)。聴講無料。

●サンデー・トーク●

10月19日(日) 「茶室・八窓庵をのぞいてみませんか?」

吉澤 悟 (当館教育室長)

11月16日(日) 「地藏菩薩と虚空蔵菩薩」

稲本泰生 (当館企画室長)

12月21日(日) 「春日社の神と藤原氏」

斎木涼子 (当館研究員)

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて。先着200名(午後1時30分より開場)。聴講無料。

◆奈良国立博物館賛助会

2008年10月1日現在、一般会員(個人)24名、一般会員(団体)14団体、特別会員1団体、特別支援会員6団体のご入会をいただいております。

このたび、次の方に新たにご入会いただきました。改めてお礼申し上げます。

【一般会員(団体)】ひかり装飾株式会社 様

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円(共催展の場合は別途定めるものとします)で観覧できます。(学生証および引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。

【会員大学等(2008年10月1日現在)】

大阪成蹊大学芸術学部、畿央大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都橘大学、京都大学、京都伝統工芸大学校、近畿大学文芸学部、実践女子大学文学部、就実大学人文学部、種智院大学、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良文化女子短期大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛光大学、龍谷大学(五十音順)

ご だい そん ぞう 五大尊像

絹本着色 各縦138.0cm、横88.0cm
平安時代(11世紀)
国宝
岐阜・来振寺



ふ だう ごうざんぞ ぐん だ り だい い とく
不動、降三世、軍荼利、大威徳、
う す さ ま
烏枢沙摩の五尊からなる明王
画像。五大明王それぞれの前
に壇を設けて怨敵調伏や出産
などの祈願をするという、五壇法
とと呼ばれる密教修法の本尊画
像として用いられたと考えられる。
通例の五大明王像と比べると、
こんごう や しゃ
金剛夜叉明王に替えて烏枢沙
摩明王を配し、童子形の脇侍や
ひざづつ
跪く眷属を配する点などに特
色があり、こうした図様は智証大

師円珍(814-891)が唐から請来した図像に基づくといわれる。

五幅のうち降三世明王の絵絹の裏に寛治2年(1088)、軍荼利明王の絵絹の裏には寛治4年(1090)の開眼供養銘が墨書されており、制作年代が判明する仏画としては応徳3年(1086)制作の和歌山・金剛峯寺所蔵仏涅槃図に次ぐ古例である。

写真に掲げる大威徳明王は、六つの顔、六本の手、六本の足をもつ恐ろしいまでの忿怒の姿をあらわす。明王がまたがる牛の肉身も一種生々しいまでの迫力ある描写を示すが、その一方、頭髮や衣文に繊細な截金線、着衣には華麗な彩色文様があしらわれ、さらに火炎光背には意匠化された渦を巻く炎の表現も認められる。

以上のように本品は、絵画性と装飾性を兼ね備えた11世紀仏画の様相をよく伝えており、類い希な平安仏画の基準作として近年国宝に指定された。

谷口耕生(当館研究員)

西新館 11月29日(土)～平成21年1月4日(日)

平常展の みどころ

こん こうみょうさいししょうおうきょう 金光明最勝王経 巻第六

紫紙金字 縦26.2cm 長792.5cm 18紙
奈良時代(8世紀)
国宝
当館



四天王ら諸仏諸天
による国家鎮護を説く
『金光明最勝王経』
は10巻からなり、『法
華経』『仁王般若経』
とともに護国三部経と
して厚く信仰された
經典である。

天平13年(741)2
月に出された聖武天
皇の詔によって、国ご

とに国分寺・国分尼寺が建立されたことはよく知られているが、この詔では同時に各国に七重の塔を建立し、そこに金字の『金光明最勝王経』を設置することも命じていた。国分寺の正式名称は「金光明四天王護国之神」であり、僧尼は毎月8日の『金光明最勝王経』転読が命じられた。つまりこれらは、仏教による鎮護国家思想に基づいた一連のプロジェクトだったのである。本品はもと備後国(広島県東部)国分寺に安置されていたものとされ、10巻が揃う貴重な品である。

この金字経巻書写の実態は、幸いにも正倉院文書から知ることができる。それによれば「写金字経所」が設けられ、天平18年(746)10月には71部(710巻)が完成していた。詔に紙色の指示はないが、天平18年の「写金字経所案」では装演を行った能登忍人の項に「造紫紙」とあり、ここで作成されたのが紫紙金字『金光明最勝王経』だったことがわかる。

柔らかな紫色に金字が美しく輝く本品は、奈良時代の政治・仏教の特色を体現する存在であるといえよう。なお、今回展示されるもう1つの紫紙金字『金光明最勝王経』(当館)は、鎌倉時代、本品にならない後宇多上皇が書写したもの。ぜひ見比べて頂きたい。

斎木涼子(当館研究員)

西新館 11月29日(土)～平成21年1月4日(日)

開館予定(10月～12月)

■開館時間

平常時(～10月24日、11月11日～12月31日)
午前9時30分～午後5時
※10月24日までの毎週金曜日と、12月17日(水)
は午後7時まで
正倉院展会期中(10月25日～11月10日)
月曜日～木曜日 午前9時～午後6時
金・土・日曜日、祝日 午前9時～午後7時

■休館日

月曜日(祝日の場合はその翌日)、1月1日(祝)
※正倉院展の会期中は無休

観覧料金

特別展 第60回 正倉院展

	一 般	高校・大学生	小・中学生
当日(個人)	1,000円	700円	400円
前売・団体	900円	600円	300円
オータムレイト	700円	500円	200円

*オータムレイトは、閉館の1時間30分前以降に販売する当日券の料金です

平常展・特別陳列

	一 般	高校・大学生	中学生以下
個 人	500円	250円	無 料
団 体	400円	200円	

*団体は責任者が引率する20名以上

*中学生以下、70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料です



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

*当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。